



UNITED

白子勝之 | 田中真吾 | 松田啓佑

2017年11月3日(金) - 12月9日(土)

会期中 金・土・日 12:00-18:00

オープニングレセプション: 11月3日(金) 18:00-20:00

アポイントメント承ります

今年11月 eN arts は開廊10周年を迎えることとなりました。これもひとえに関係各位のご支援ご厚情の賜物と深く感謝しております。今後とも倍旧のご支援ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

10周年を記念し、弊廊では 白子勝之・松田啓佑・田中真吾 によるグループ展覧会「UNITED」を開催いたします。是非ご高覧下さい。

eN arts

白子 勝之



untitled | 2016 | Inkjet Print (Japanese lacquer, hinoki, orchid) | H163 x W205 mm

作品は特定の意味を有さず、複数のイメージを内包しながらただそこに在るだけである。

白子勝之

1984年滋賀県生まれ。

京都市立芸術大学大学院美術研究科工芸専攻漆工修了。

白子勝之は檜、檜、シナ等から造形に最適な材や漆・顔料を選び抜き 作品を創り上げ、それらの作品は大きく **ASSEMBLE, CONNECT, SCATTER, SCRIBBLE, JUGGLE** の5シリーズに分かれます。(各シリーズの詳細は別紙を御参照下さい) 作品制作のみならず日常生活においても自分なりのこだわりを保ち、美への追求を怠らない白子勝之。陶芸・漆工・絵画・彫刻・写真・・・あらゆるジャンルに於ける自身の美意識を複数の自然界の造形物から得たモチーフに凝縮する。作品の美しさのみに焦点をあて、完成した作品は意味を持たず、息をのむ美しさだけが際立つニュートラルなスタンスを保っています。

各シリーズの詳細 | 白子勝之



【CONNECT】

植物、動物、食物など有機物の一部に、それだけのために創られた漆のオブジェを、まるでオートクチュールの衣装を纏わせるかのようにあしらひ、有機物と漆のオブジェが最高に美しい状態を写真に納める作品

UNTITLED | KS-WT1-13-006 | 2013 | 450 x 550 mm | インクジェットプリント



【SCRIBBLE】

フリーハンドで描かれた何百もの線描（スクリブル）の中から選び抜かれたものを拡大し、その線描を一枚の板（多くの場合はMDF）から立体的に削り出す。さらには 別途創られた艶やかな漆のパーツをその立体に組み合わせ完成させる作品。

UNTITLED | KS-WT2-11-001 | 2011 | 1,210 x 1,170 x 110 mm | 漆, MDF



【ASSEMBLE】

繊細に彫り上げた木のパーツに漆や顔料を それぞれの造形に最もふさわしいバランスで必要最小限に施し、それらを緻密に組み立てて造る建築的な作品。

UNTITLED | KS-WT3-14-002 | 2014 | 38 x 38 x 89 mm | 漆, 顔料, シナ材



【SCATTER】

空に浮かぶ雲、庭園の苔、海間に浮かぶ波泡、はたまた箱から飛び出してしまったジグソーパズルのピースのように木彫パーツが散らばる作品。同時進行で作成した複数の木彫パーツをそれぞれ単体で見せることもある。

UNTITLED | KS-WT4-14-001 | 2014 | 62 x 55 x 28 mm | 顔料, シナ材, 膠



【JUGGLE】

穴の開いたパーツを作り、その穴に籐を差し込むことにより様々な方向にしなったりうねったりするラインの造形美が作品として成立するシリーズ。籐が描く優美なラインはパーツの形状だけではなく、湿度や温度などの環境によっても変化する作品群。

UNTITLED | KS-WT5-17-008 | 2017 | 205 x 350 x 320 mm | 胡粉, 膠, 檜, 籐

田中 真吾



meltrans #027 | 2017 | iron, plastic | H920 x W720 mm

人が火を使うということ。
私はそこから生まれる物質の変性を取り入れながら制作を行っている。

やっていることはシンプルだと思う。
形式に拘らず、様々な素材を組み立てては燃やす。作品によっては崩れた物質をまた組み立て直し、再度燃やす。その行為をただただ繰り返す。紙は灰となり、木材は焼け落ち、鉄は湾曲し、ビニールは溶解して液体へと還元される。

作業を続ける中で、ふと、自分が何をしているのか分からなくなる。
この作業は「壊している」のか「作っている」のか、それとも「描いている」のか「削っている」のか、分からなくなる。

何かしら形として積み上がっていく以上、大局的に見れば「作っている」という言葉に集約されていくとしても、そこに至るまでの一手一手は、常に「再生」と「破壊」の二極を等値として含み続けている。「壊す」だけではなく「作る」だけでもない。その同時発生性。それは、「壊しながら作る」であり、「作りながら壊す」でもあるという矛盾を抱えながら、自らの選択をどこで行うのかと問い続けることである。

何も明確ではない。何か一つでは言い切れない。その曖昧さを肯定すること。
行為が積み上がった果てに立ち現れてくるものが何なのか、いまだ私は適切な言葉を持たないが、そのような結果にも人の想像力は働きかけ、視覚は何かを見つけ出そうとする。そうした作品とのやり取りの中から、表現と言葉の可能性を探していきたいと思う。

田中 真吾

1983年大阪府生まれ。

eN arts

〒605-0073 京都市東山区祇園町北側円山公園内八坂神社北側
www.en-arts.com | info@en-arts.com | 075-525-2355

京都精華大学大学院芸術研究科修了。

田中真吾は 在学中より一貫して「火」を題材に、「火」を材料・道具・手段として駆使しながら、様々な角度から「火」を表現する作家で、「焼く」「溶かす」という意志が関与する人為的な行為と「燃える」「溶ける」という人がコントロールできない現象の狭間を往き来しながら制作を続けています。

田中の作品シリーズは「trans」からスタートしました。「trans」では、何層にも重ねた紙をシンプルに「焼く」ことにより、その紙は表層から順に燃え上がり、やがては炭や灰と化し、想像をはるかに超える美しい造形物(作品)を生み出しました。「trans」から「overlap」「HEAT」「ゆらぎの界面性」といくつかのシリーズを経て「re: trans」が誕生しました。このシリーズでは廃材や端材など異素材を組み合わせ「焼く」という行為を施すことにより、燃焼現象そのものを作品とするのではなく、異素材と燃焼のレイヤーにより作品に奥行きが生まれました。「warp」では、同一条件(例えば「等間隔に設定された箇所」に5秒間バーナーをあてる)を保ちながら鉄板を「焼く」行為の繰り返しにより、その鉄板がうねり歪んでいきます。人為的な行為と自然現象が織りなす「アンバランスの美」が火と人間の関係性を象徴しているかのような作品群です。

松田 啓佑



UNTITLED | 2017 | Oil on canvas | H455 x W333 mm

人間は見たいものしか見れず、使っている言語によっても見える世界が違うように、絵画の言語によっても見える世界があるはずで、それを直接絵にしようとしています。

そのために私は、あらゆるものを、存在しているというところでピントを合わせて、そこから絵画の言語によって世界を認識して絵にできるのではないかと考えています。

松田 啓佑

1984年生まれ。

京都市立芸術大学大学院（油画専攻）修了。

2014年 東京ワンダーサイト入選。

2017年3月11日上野の森美術館 VOCA展2017 出展（推薦者：森美術館学芸員徳山拓一氏）

松田啓佑の絵画は、抽象画と思われがちですが、実はその逆で「目の前に現れるイメージをそのまま描き写す」すなわち描く対象が明確に存在するのです。現れては霧消するイメージが自身の脳裏に留まっている間に、迷いのない大胆な筆使いと色彩で描く という独自のスタイルを貫き通しています。